

授業形態	講義	科目名	世界建築史	必選区分	必修
開講学科・学年	大築1年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他（ ）			
どのような方法を取り入れたか	パワーポイントを使用し、写真や図面、動画などを示しながら、ビジュアルな説明を多く行うようにしている。重要な建築図面や写真、地図などのプリントを配布するとともに、小テストを毎回行っている。学生は小テストの問題を読んで当該回の要点を予想した上で、説明を聞きながら小テストの解答欄にメモをとる。学生の様子を見ながら適宜説明を止めて、解答に専念する、あるいは学生の机を回り質問を受ける時間を授業中に2、3回程度確保している。さらに小テストの最終問題では授業内容に関連した論述を求めている。その小テストは、コピー・スキャンした上で、次回の授業時に学生に返却し、学生の記述について講評してフィードバックを図り、学生の知識の定着及び論理的思考能力の向上を試みている。使用したパワーポイントのデータを授業後に公開し、復習に活用できるようにしている。				
取り組みの効果	小テストに解答しながら説明を聞くことで、内容に興味を持ちやすいようである。授業中に質問の時間をとることで、難しい内容を再度説明するなど、個別の対応が可能である。また教員がうまく説明できていない部分も授業時間内に把握できる。				
今後の課題	科目の性格上、広い範囲に及ぶ建築の歴史の一部だけを説明することになるが、この授業をきっかけとして、自主的に文献を読んで理解を深め卒業研究のテーマを考えるなど、授業終了後に学んだ内容をどのように活用するかが重要であると考えている。				

授業形態	講義	科目名	日本建築史	必選区分	必修
開講学科・学年	大築1年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を 取り入れたか	<p>日本建築史は、建築を理解するうえで基礎的な科目のひとつで、授業ではその史的、様式的な理解が大切になります。授業中、史的理解については高校までの日本史授業が背景となり、それなりの効果が期待できるのですが、一方の様式的理解については教科書の図版やスライドだけでは不十分であり、なかなか学生の理解が進みません。本学科ではフィールドワークという授業が別があり、それは毎週土曜日に実際の建築物を見学しに行くものです。学部1年生の前期フィールドワークでは、多くの回が歴史的建造物の見学にあてられますが、試みた取り組みとしては、日本建築史での授業とフィールドワークでの見学先をより密接に関連させることを行いました。具体的には浄土教建築を学んだ週に平等院や法界寺を訪れ、大仏様建築を学んだ週に東大寺南大門を見学するなどといった対応を行います。見学先では、教員が詳細な説明を行い、学生はスケッチやメモをとります。そうした実見にもとづいた知見を深めるために、翌週の建築史授業において小テストを実施します。</p>				
取り組みの効果	<p>日本建築史授業とフィールドワーク授業を密接に関連させることで、教科書図版やスライドばかりに頼った講義の内容がより具体的になりました。またフィールドワークを介することで、自ずから授業後の復習が行われ、さらにはその見学内容について小テストを行うため、テストに向けた自然な予習も可能となりました。たとえば東大寺法華堂を見学した際には、正堂部と礼堂部における様式の相異を目の当たりにした多くの学生が歓声をあげ、専門教育を受けた者しか得られないような感動を受けておりました。こうした具体的な経験からも、日本建築史授業における内容の理解に効果があったことを実感しました。</p>				
今後の課題	<p>今回の取り組みは、講義科目での抽象的な内容を、実際の建築を見学することでその理解を深めようとしたものですが、一方で授業中のすべての内容について実見できるわけではありません。また建築史では史料においてのみ確認できるような現存しない建築様式も散見されるため、今後はそうした抽象的にならざるを得ない内容の理解を如何に進めるかに工夫の余地があるかと存じます。</p>				

授業形態	講義	科目名	建築数学	必選区分	必修
開講学科・学年		大築1年	受講者数		約50名
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を 取り入れたか	<p>小テスト、講義、宿題を組み合わせた密度の高い授業の展開          本学建築学科では、1年生から演習を中心とした本格的な専門教育を行っている。そのため、数学を含む理数系の教育に割くことができる授業時間は他の多くの大学の建築系学科と比較して短い。とりわけ数学は、各自で問題演習を積まない限り絶対に習得できないが、問題演習の時間を授業時間の中で十分に取ることが難しい。そのため毎回90分の授業を小テストと講義によって構成し、最後に宿題を出すという流れで行っている。</p> <p>1) 毎回の小テスト          小テストは、(a) 前回の授業内容の確認、および (b) 授業内容の理解の前提となる高校数学の内容の確認、を目的として実施している。(b) は入学後の基礎学力テストにおいて、高校数学の理解が不十分と判断した学生に対し、入学後リメディアル教育の受講を義務付けた上で実施している。試験時間は15分程度であるが、問題により異なる。終了後は板書により解説を行い、学生相互で採点のうえ回収している。</p> <p>また第6回、11回の授業では45分程度の中間テストを行い、学習内容のさらなる定着をはかっている。</p> <p>2) コンパクトな講義          小テスト実施後の残り時間で、学生が板書を全部書き写す時間を節約し、密度の高い講義を行うため、テキストを毎回プリントで配付している。          テキストは市販で1冊にまとまった適切なものがないため、以下の5点に留意して独自に作成している。(a) 高校数学との連続性と、毎回の積み上げに留意すること。(b) 建築分野での数学の応用実例を可能な限り盛り込み、学習の動機づけとすること。(c) 一級建築士試験への対応を重視した上で、それにとどまらず実務や研究等で利用される高度な内容も盛り込むことにより、飽きずに学習に取り組めるようにしつつ、高学力の学生の知的好奇心を刺激する内容とすること。(d) 証明はできるだけ載せ、解説する時間がない場合でも「なぜそうなるか」という素朴な疑問に応えられるようにすること。(e) 講義での説明時間が不足した場合も後で見直せばわかるように、ページ数が増えても計算過程をできる限り省略しないこと。</p> <p>3) 毎回の宿題          授業の最後に、テキストの練習問題のうち3題程度を指定して宿題とし、次回の授業までに解いて提出することを義務付けている。練習問題は答えもあらかじめ配付し、各自で答え合わせをしてもらっている。小テストや中間テストに向けて、指定された問題以外も解いて勉強している学生も多いようである。</p>				
取り組みの効果	<p>小テストと宿題を通して、学生一人一人がおのずと授業時間外で問題演習の時間を取るようになった。講義は、限られた時間で密度の高い内容を行うことができている。作成したテキストは、建築を学ぶ学生を対象を特化したうえで、高校数学からの積み上げによって数学を学ぶためのテキストとしては、他に類をみない内容である。</p> <p>入学後リメディアル教育の対象になった学生が、トップクラスの成績で本科目の単位を修得する事例もあり、学習意欲が高い学生には特に効果的なようである。</p>				
今後の課題	<p>毎年残念ながら不合格者がおり、補習、再試験を行っている。大半の学生は再試験で合格するが、翌年度再履修になる学生も若干名いる。</p> <p>現在は毎回プリントでテキストを配付しているが、予習をしたいという声もある。毎年修正を加えていることもありプリント配付としているが、将来的には教科書化すべきかもしれない。</p>				

授業形態	講義	科目名	現代建築論	必選区分	必修
開講学科・学年	大築1年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	<p>①小テストの実施および採点した小テストの返却 講義の内容に関する論述式の小テストを、およそ2回の講義に1回の割合で、講義の冒頭を実施している。小テストは、次回の講義時に採点して返却し、理解が不十分な点については講義内容の復習を行っている。</p> <p>②授業アンケートの実施による授業改善の工夫 ほぼ毎回の授業の最後に自由記述式の授業アンケートをとることにより、学生からの授業改善に関わる要望や講義内容に関する質問に対応して、次回以降の授業に反映できるようにしている。</p> <p>③講義と関連した学外での建築の見学 「フィールドワークIA」では、講義や演習の内容と関連づけて、実際に建築を見学している。</p>				
取り組みの効果	<p>① 前回の講義内容の定着をはかるとともに、学生の文章表現力の向上に寄与できている。また、小テストを課している間に出席確認ができるので、授業時間の有効活用にもつながる。</p> <p>② 学生の改善要望や質問に対して、迅速に対応できることにより講義をより有意義なものにできている。</p> <p>③ 講義内容に関連した実際の建築を見学することにより、自身の体験も踏まえて講義内容に対する理解をより深めることができる。</p>				
今後の課題	<p>① 例年、学年の2割程度の学生の文章表現力があまり高いとは言えず、最初は論述形式の小テストについていけず戸惑う学生もいる。そのため、文章表現方法についても講義で説明をする必要があり、その分、講義時間が圧迫されてしまう。また論述形式の小テストを実施しても、高校までの勉強の延長で、すぐに答えを求めようとして、回答例を示すと一字一句書き写す学生も多い。</p> <p>② 授業改善の要望に対してどこまで対応すべきか判断が難しい場合がある。また多数の質問があった場合は、講義時間内で全てに回答することが難しい。</p>				

授業形態	講義	科目名	建築一般構造 I	必選区分	必修
開講学科・学年	大築1年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	毎回の授業の後にミニアンケートを実施。自由記述で、記入内容は授業を受けて興味を持ったこと、よくわかったこと、わかりにくかったこと、質問事項など。アンケート結果に基づき、次の授業の冒頭にわかりにくかったことや質問事項について説明を行う。				
取り組みの効果	昨年度の授業アンケートでは、授業の進め方や指導方法が適切か？との質問には44%がそう思う、52%がややそう思うと回答。学生の積極的参加を促すための工夫がなされていますか？との質問には58%が強くそう思う、33%がややそう思うと回答。以上から学生の理解を深めるため、一定の効果を考えていると考える。				
今後の課題					

授業形態	講義	科目名	建築環境工学Ⅰ・Ⅱ	必選区分	必修
開講学科・学年	大築2年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input checked="" type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を 取り入れたか	<p>建築環境工学では、建築を取り巻く、音・光・熱・湿気といった物理的な環境要素を学生自らが認識し、それらが建築に及ぼす影響やそのメカニズムを直感的に理解できるように心がけている。</p> <p>目に見えない環境要素は、学生にとっては理解しづらいようである。そのために、(1)授業中に光や熱(温湿度)の程度を確認するための測定機器を回覧し、測定をしながらその原理を説明する。(2)環境工学Ⅱと並行して開講される建築環境工学実験にて、建築スタジオや甲子園会館など身近な場所の環境要素を測定し、それらに影響を及ぼす要素の抽出とメカニズムの説明を授業で行うことで連携を図る。(3)学生が取組中の設計演習に授業の内容を反映できるような説明を加える。(4)関連するFWにて具体的に環境要素がデザインされた建築を見学する。などを実施している。とくに、建築スタジオや甲子園会館などでの設備機能を具体的に例として挙げ、確認することで学習への意欲を上げることができていると考えている。</p>				
取組みの効果	<p>授業中に測定機器を扱う(上記(1))ことで、環境要素を可視化することができ、記憶に残るようである。また、事例の中に甲子園会館や建築スタジオを取り上げる(上記(2))こと、設計演習に絡んだ内容を説明する(上記(3))こと、FWの見学(上記(4))などで、設計にも応用かつ展開できるヒントを得ているようである。</p>				
今後の課題	<p>上記(3)の設計演習との関連については、図面に表記できるコンテンツを増やしていく必要がある。また、演習担当側にも、関連する項目を課題の中で結果として取り入れるよう働きかけることも重要と考える。</p>				

授業形態	講義	科目名	建築設計計画Ⅱ	必選区分	必修
開講学科・学年	大築2年		受講者数	約45名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取り組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を取り入れたか	福祉環境整備に関する授業では、整備計画の方法や関連法規を学んだうえで、教室から車いすで甲子園会館の玄関前まで学生たちに移動してもらいます。普段何気なく生活している空間を、車いす使用者の視点で移動すると、設計時に配慮すべき点に気付くことができます。また車いすの操作や、介助を体験することで理解を深められると思います。敷居などの段差の高さやスロープのこう配の測定、扉の開き方なども確認します。改めて現行のバリアフリー法における基準が、障がい者にとってどの程度のもなのかも少しでも実感できればと思っています。				
取り組みの効果	学生によって様々ですが、車いすが通る開口部の幅、人や車いすがすれ違うための廊下の幅などスケール感を養うのには効果があるようです。しかし、毎回行っている自由記述の授業アンケートでは、「体験してみてもよかったです」と多くの学生が感想を述べているものの、実際には小テストなどを課すとわかっていないことがあります。				
今後の課題	「わかったつもり」というのが一番怖いので、「わかったつもり」が「本当にわかった」になるためには、もう少し現地での説明と、必要であれば関連法規などよりどころとなる事柄との関連を確認できるようにしていきたいものです。 また、上級学年の設計演習でも生かせる知識ですが、「講義科目は定期試験が終わったら、そこで学びも終了」と、積み重ねて設計に生かすことができない学生も散見されるので、学びは積み重ねであることを意識づける授業の方法を考えていきたいものです。				

授業形態	講義	科目名	近代建築史	必選区分	必修
開講学科・学年	大築2年		受講者数	約45名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法 を取り入れたか	<p>1. 毎回の授業の枠組みをプリントにし、取り上げる項目を列挙して、受講者にノートを書き込ませる。</p> <p>2. 授業の終わりに、そうしたノートの内容の復習とその回の授業内容に関する小テストを行う。</p> <p>3. 次週のはじめに前回の復習として、配布プリントの読み返しを行い、小テストの模範解答を示して説明を行う。</p> <p>4. 必ずしも教科書の構成通りに講義を行うわけではないので、該当する教科書や参考書「近代建築史図集」のページ数を毎回、明示し、復習として、読解しておくことを指導。</p> <p>5. 教科書や図集に不足しているカラーのスライドなどをできるだけ多く示し、具体的な特徴を丁寧に説明をすすめる。</p>				
取り組みの効果	<p>1. 項目ごとに各自で記入することにより、手軽にノートをまとめることができ、理解が進んだ。またノートに書けず、理解できていない個所の認識もしやすく、授業後、もしくは次回授業の際に、確認の質問に来る学生も増えてきている。</p> <p>2. 小テストの模範解答として、前回授業の内容をまとめて解説することで、毎回の授業全体の狙いがあらためて理解され、各週の授業の関連が理解しやすくなったとのこと。</p> <p>3. まだまだ不十分ではあるが、10分程度で、簡潔に小テストの回答にまとめる文章力が養いつつある。</p> <p>4. 個々の建物に関心を持ち、個別に調べたり、ネットで探したりする学生も少なくない。</p>				
今後の課題	<p>1. 自分の文章にまとめることが困難な学生も散見される。単語の列挙程度の者も見受けられ、そうした受講者の文章力アップを図る必要がある。</p> <p>2. 演習その他、他の科目が忙しいこともあり、集中して、建築史関連の本をじっくりと読破することがなかなかできない。演習課題などと連動させて、課題の参考建物のような形で、より具体的に理解する機会を多彩に作りたいと考えている。</p>				

授業形態	講義	科目名	建築構造力学 I	必選区分	必修
開講学科・学年	大築2年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取り組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取り組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取り組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を取り入れたか	講義形式の90分授業であるが、静定構造に関する基本的な内容や解く手順を一通り説明した後、できるだけ学生自らで問題を解けるように演習時間を設け、実際に手を動かして問題を解かせるようにしている。演習の間は、各学生が理解しているかどうか確認して回り、分かっていない場合は1対1で丁寧に教えることを心掛けている。90分の講義時間の中で演習のための時間は限られており、平成26年度前期では15分程度を演習に充てていたが、一部の学生には時間内に十分に教えることが難しかった。そこで、今年度前期では、思い切って30分を目安に演習の時間を設けるようにしている。				
取り組みの効果	上記の取り組みは、大抵の学生にはとても有効であり、実際に手を動かして計算することで、静定構造に関する理解を逐一確認しながら深めることができている。また、1対1で教えることにより、学生の様々な基本的な考え違いを直すことができ、正しい理解に導くことができている。				
今後の課題	上記の取り組みは今年で2年目なので、学生の習熟度をつねに観察しながら、授業を進めていきたい。とくに今年度の学生達については、講義で聞くだけでなく実際に問題に取り組むことで構造力学に対する学習意欲が湧くようで、これまでの習熟度はとくに高いと感じている。				

授業形態	講義	科目名	建築設計計画Ⅲ	必選区分	必修
開講学科・学年	大築3年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法 を取り入れたか	<p>授業の内容は、現代の建築家に不可欠な「地球環境倫理」の概念を理解させるものとしている。日本伝統的建造物や庭園を題材に環境技術や生活態度のあり方、文化の形成および景観について取り上げ、学生に「善」の問題について考えさせるものである。また、温暖湿润気候である日本の特長をわかりやすく示すために、ヨーロッパや中国、西アジアの乾燥地帯の建築および景観などがわかる写真を示している。</p> <p>授業開始15分間は、毎回、2～4問の小テスト(10点満点)を実施している。これは、前回の授業内容を、どの程度学生が理解できているのかを確認するためである。小テストの結果が評価対象となっているため、全員分の採点結果を公開することで、学生に時間外学習を促すようにもしている。</p> <p>授業の資料は、使用するパワーポイントからキーワードを穴抜きにしたものを用意し、学生に配布している。記述式にすることで授業に集中させ、また同時にキーワードを覚えさせて小テストの得点数を上げる狙いがある。</p> <p>また、キーワードは英語を併記することで、専門知識と同時に英語力も養えるようにした。</p>				
取り組みの効果	<p>一昨年末までは、授業の資料としてパワーポイントの内容を全て配布していたが、授業に集中せず、受講態度が悪くなったため、昨年度は資料を配布するのを中止した。ところが、手元に資料がないために、授業中に映し出されたスライドを携帯電話やスマートフォンで撮影する学生が目立った。昨年末までは携帯電話やスマートフォンでの撮影を許可していたが、スライドを撮影するだけで授業の内容を理解せず、授業の内容が定着しない。そのため、今年度は穴抜きの資料を配布し、キーワードを記述させる方式に変更した。その結果、小テストの成績が向上し、全体のボトムアップにつながった。</p>				
今後の課題	<p>授業の内容は、午後から行われる「建築設計演習Ⅲ」とも連動しているため、小テストの成績をさらに上げる工夫が必要と考える。</p>				

授業形態	演習	科目名	初期演習	必選区分	必修
開講学科・学年	大築1年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	必ず出席番号順に座ってもらう。				
取り組みの効果	<p>誰が遅刻をしたか、誰が休んだかが全員に一目でわかる。  出席をとる時間が大幅に節約できる。  回収物も、番号順にスムーズに回収できる。  仲良しグループで座ることがないため、私語が少ないように思う。  新入生オリエンテーションと同じ席なので、初心にかえることができる。</p>				
今後の課題					

授業形態	演習	科目名	CAD・CG応用演習Ⅰ・Ⅱ (現 図学情報基礎演習Ⅰ・Ⅱ)	必選区分	必修
開講学科・学年	大築2年		受講者数	約20名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	図学を学ぶ単元において、3次元の立体を2次元表現する複雑な操作を直感的に理解させるための模型(約30種類)を手作りで作成し、これを用いて解説した。				
取り組みの効果	学生は非常に興味を持って授業に参加した。分かりやすいと好評であった。授業時間外に学生同士で上記の模型を使って教えあうこともあった。				
今後の課題	模型は20～30cm程度と大きくないため、離れた席の学生から見にくいこともある。模型のサイズアップもしくはカメラとプロジェクターを使って大きく写して説明するとより効果があると思われる。				

授業形態	演習	科目名	建築設計演習Ⅱ	必選区分	必修
開講学科・学年	大築2年		受講者数	約40名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/>	理解を深める取組み			
	<input type="checkbox"/>	意欲・関心を高める取組み			
	<input type="checkbox"/>	発言を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	時間外学習を促す取組み			
	<input type="checkbox"/>	学習態度を良くする取組み			
	<input type="checkbox"/>	その他 ( )			
どのような方法を 取り入れたか	<p>課題1：木造のクラブハウスの設計、および、課題2：両親の家            建築学科の学生が本格的な設計に取り組む最初の課題であるため、平面や断面の計画と構造との関係を理解し易くするために、縮尺1/20と1/30の軸組模型、筋交いの役割を示す構造模型、耐力壁計算用の模型を用意し、それらを使いながら解説を行った。</p> <p>また、それらの模型を演習室に展示し、学生たちが自由に見て、触りながら木造の架構についての学習ができるようにした。</p>				
取組みの効果	<p>特に理解が難しい屋根の架構について、和小屋と登り梁の代表的な2種類を一つの軸組模型の中に示すことで、それぞれの架構の違いから生まれる空間の違いを3次元で確認することが可能となる。学生たちは、各自の検討している設計案に対し、どのような屋根の架構が適しているのか、模型から空間を想像し、現実に即した無理のない木架構についての理解をスムーズに行えるようになった。</p>				
今後の課題	<p>縮尺1/20の模型では、建築空間として体感することは困難である。そのため、関連科目の「フィールドワークⅡA」では、木造住宅等の建設現場の見学を企画するが、時期によっては適当な見学先がない場合がある。そういった場合に備えて、1グリッド(=2.4m立方)程度のモックアップなど、原寸大の教材で部材の寸法や空間を体感させる工夫が必要と考えている。</p>				

授業形態	実験	科目名	建築材料実験	必選区分	必修
開講学科・学年	大築3年		受講者数	約50名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他 ( )				
どのような方法を取り入れたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4班から6班に分けて、受講者全員が実験に確実に参画できるよう配慮</li> <li>・各班の作業に時間差を設けることによって、待ち時間をなくし、集中力を維持しながら実験できるよう配慮</li> <li>・実験の対象とする試験体を学生自らが作成することにより、構造体の成り立ちを確実に理解でき、また、実験への意欲・関心の向上を図る</li> <li>・万能試験機や加力装置を用いず、学生自らの「力」で試験体に加力することによって、実験の各ステップを確認しプロセスを確実に把握し、同時に「力」の大きさを体感できるよう配慮</li> </ul>				
取り組みの効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受講者全員に平等に試験体に触れる機会が与えられた</li> <li>・試験体作成から関わることにより、実験に対する高い動機づけが可能になった</li> <li>・構造体に作用する「力」の大きさを体感し、構造体の挙動を間近に見ることにより理解が深まった</li> </ul>				
今後の課題	特になし				

授業形態	講義	科目名	建築設備設計論Ⅱ		必修区分	選択
開講学科・学年	院卒業 1 年		受講者数		約 10 名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input checked="" type="checkbox"/> 理解を深める取り組み					
	<input checked="" type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み					
	<input checked="" type="checkbox"/> 発言を促す取り組み					
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み					
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み					
	<input type="checkbox"/> その他 ( )					
どのような方法を 取り入れたか	<p>本授業は地球温暖化対応の社会動向を踏まえ、省エネルギーに対する自己の考え方を整理・確立し、建築計画に必要な設備基本計画の設計能力を養うことである。</p> <p>課題の範囲が大きくとらえにくいので、省エネルギー手法の理解を深め、取組意欲を上げるため、一番身近で使われ方もよくわかっている、各自宅の消費エネルギーの計測・考察を授業の核とした。計測方法・計測機器を与え、まず自宅の消費電力量について 2 週間の計測を行い、自宅の電力消費量を分析し、10%削減の省エネ計画を立て、続く 2 週間の測定を行い、計画の妥当性の考察をするものである。それを各自発表し、討論することで、ライフスタイルの違いによる各家庭の考え方や、省エネ手法の違いを理解し、各種の身近な省エネルギーの方法やエネルギーの選択を学ぶ。</p>					
取り組みの効果	<p>エネルギー消費の実態とそれまで考えていた消費イメージの違いが実測により確認でき、現状を正しく知ることができるようになる。</p> <p>発表を聞くことで、各家庭の考え方や価値観の違い（ライフスタイル）を理解でき、フレキシブルな考え方を身に着けられる。</p>					
今後の課題	<p>年次を積み重ねることにより、データも蓄積され、それを反映したより具現的な省エネ行動の重要性の理解と、実社会での実践・展開や効果のフォロー。</p>					

授業形態	演習	科目名	建築設計総合演習Ⅱ・Ⅲ	必選区分	選択必修
開講学科・学年	Ⅱ：院築修1年 Ⅲ：院築修2年		受講者数	約10名	
最も力を入れた 取り組みポイント	<input type="checkbox"/> 理解を深める取り組み				
	<input type="checkbox"/> 意欲・関心を高める取り組み				
	<input checked="" type="checkbox"/> 発言を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 時間外学習を促す取り組み				
	<input type="checkbox"/> 学習態度を良くする取り組み				
	<input type="checkbox"/> その他（ ）				
どのような方法を取り入れたか	<p>課題期間前半（各自の設計案が概ね定まるまで）は、設計演習の時間を個々の作業および教員との個別の対話だけで終わらせるのではなく、原則 毎回の演習の最後に、学生全員にその日の作業成果や進捗状況を発表させ、それについてグループディスカッションを実施した。必ず複数回は発言するように義務づけた。</p>				
取り組みの効果	<p>学生同士が意見を出し合うことにより、多面的な検討を促し、各自の設計案の質を高めることができた。授業の最後にその日の成果を発表しなければならないので、集中して作業にとり組む。毎回の演習の達成目標を学生が明確に理解できる。</p>				
今後の課題	<p>成果の発表およびグループディスカッションの時間が作業時間を圧迫することもある。両者のバランスについて検討の余地がある。</p>				